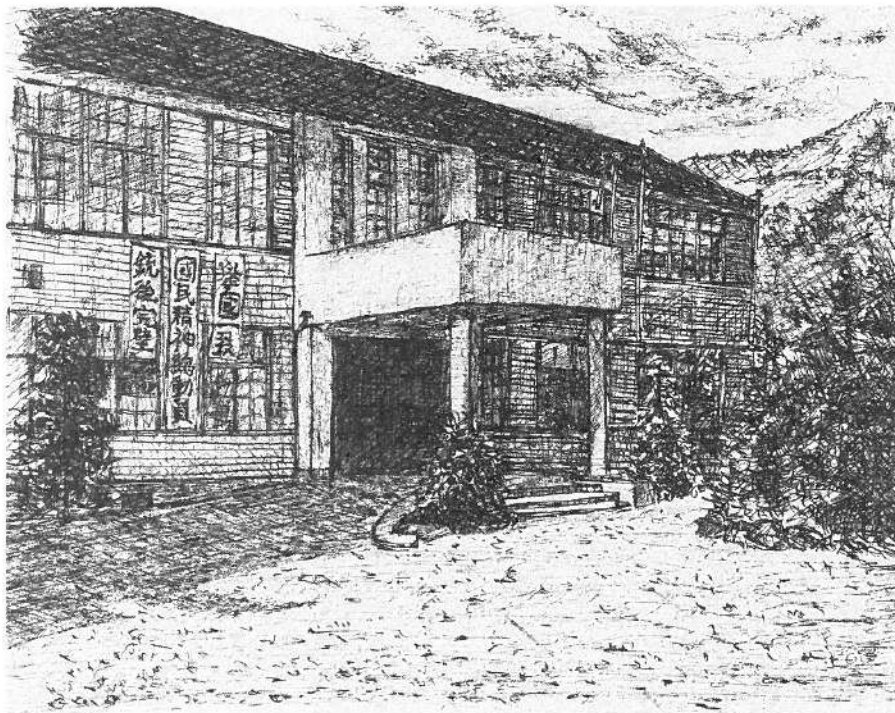


桐 蓄

編集発行 第7号
 群馬県立桐生工業高等学校
 同窓会事務局 編集部
 群馬県桐生市西久方町1-1-41
 TEL 0277 (22) 7141
 印刷 湯浅印刷有限会社



正面玄関

特

集

戦後五十年

それぞれの

記憶

同窓会長 五十嵐健雄

山くれて紅葉の朱をうばい
けり
蘇村

同窓会員の諸兄には益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。桐蓄七号の発行に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

今年には戦後五十年に当たります。長く続いた戦争で国土は荒廃し多くの犠牲者を出しての敗戦は、人心生きる術を失いしばし無気力状態に追いやりました。あの荒廃の中から立ち上がり今日の繁栄を想像した人は誰もいなかったでしょう。当時を偲び、多くの先輩並びにその犠牲者の上に今日の繁栄が築かれている事を心に刻み、将来への発展の礎石となればと戦後五十年特集を組むことになりました。

新春早々に阪神地区は大震災に襲われ同窓会関西支部に於いても多くの会員が被災されました。想像を越えた大災害に只々驚くのみでした。この苦境に支部長はじめ役員の方々が連絡を取り合い、お見舞い等に万全を尽くされ被災会員の立ち直りに大いなる力を与えて下さった事に深く感謝し厚く御礼申し上げます。

会の運営に過大な尽力を戴いている学校と事務局を預かる先生方、それに先輩諸氏の変わらぬご指導に厚く御礼申し上げます。

謝し厚く御礼申し上げます。同窓会からも早速お見舞いを申し上げます。会員諸兄も勇を奮われ五月二十七日には支部総会を開きお互い無事を確かめ合われたことはこの上ない幸せでございました。今後の復興へのご健闘と支部の益々のご発展を祈念致します。六月二十日開催の定時総会には校長先生をはじめ顧問各氏、先輩等を迎えて各支部より百名を超える会員が産業文化会館に集い、八月二三日開催の第四回ゴルフコンペには二百名の諸兄が新設の赤城力ントリークラブで支部対抗戦をも交えて技を競い旧交を温め合う事が出来ました。この様に大勢の参加を得られた事は会員各位の同窓会に対するご理解の賜物と感謝致しております。

支部内外の会員諸兄の益々ご健勝の内でのご活躍と更なる交流交歓が促進されます様に祈念しご挨拶と致します。

桐生七号

発行にあたって

桐生の「いま」

校長 加藤通頭

猛暑も過ぎ、涼風とともに秋の訪れを感じる季節となりました。

同窓会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さらに、桐生七号が終戦五十周年特集号として発行されることは、偏に同窓会役員の方々をはじめ会員各位の桐工魂が、今でも健在であることの証として、皆様とともにお慶び申し上げます。

さて、学校では昨年度末までに、所謂機械科棟を全面改修工事いたしました。まったく新しい四階建の建物に、実習室はもちろん、会議室や家庭科室を備えております。家庭科は、現二年生より必修となり、連日有効利用されております。今後は、体育館や視聴覚室の大改修、グラウンド整備等々、県当局のご協力のもとに押し進めてまいりたいと

思っております。

また、生徒の構成も一昔前と比べ、隔世の感があります。

現在は、全日制八二五名中、女子が一三七名(一六・六%)を占めております。

その生徒達の活躍ぶりですが、本年度になってからも操は国体・インターハイへ、陸上・テニスは関東大会出場、文化面では、染織デザイン科生徒が栄えある関東代表として、全国工業高校研究成果発表大会に出場、また国連五十周年ポスターコンクールでは、県一位の生徒も出ました。今後予定されている各種の大会でも、昨年度に増した成果をあげるものと期待しております。

精神面では、従来一握りの生徒だけで行われていたボランティア活動も、全科・全クラスをあげて取り組んだ結果、それを全員のものに、そして自らの糧にしようと頑張っております。昨年度から取り組み始めた国際交流も、本年度は生徒六名のニュージランドの高校訪問へと幅が広がりました。そして、今年度は語学教育のより一層の充実を求め、カナダ人を英語助手と

して登用いたしました。

定時制は、大激動です。現在、総計七二名の生徒が、機械・電気に分かれ学んでいますが、来年度新入生より、生徒の実状とニーズに照らし工業技術科一科にまとまります。

また、昨年度皆様にお世話になった野球部は、決勝で惜敗し無念の涙を飲みましたが、かわりに柔道部の二名が全国出場を果たしてくれました。先輩諸兄に続けと頑張っている全・定在校生の心意気を感じとって頂ければ幸いです。

そして、この伝統は将来の桐生にも引継がせねばなりません。物つくりの大切さ、面白さを理解し、心豊かで健康な人の入学を期待して、今年も桐工フェアを十二月に開催いたします。最後になりましたが、同窓各位のご健勝と、今後のご指導を祈念し、筆をおきます。

開校記念講演

川本技研工業株式会社
工コサーピス株式会社
常務取締役(23W卒業)

米山 稔氏

演題「やる時はやろう」友ありて人生楽し

本校入学時は戦時中で、講堂で飛行機作りをしたこと。当時は野球が強く、新川球場で行われた北関東大会の決勝(対桐中戦)では応援の甲斐

あって優勝・甲子園への切符を手にした話等、当時を思い出され言葉を詰まらせる場面もありました。講演の中では、御自身四つの大きな節目があったことを話され、さらに、人生には三つの「坂がある」。上り坂・下り坂・まさか。このまさかをどう越えるかが、人生の大きな岐路になること。社会人としての評価を決めるのは学歴や経済力ではないこと。最も難しいのは「自分自身に打ち克つ」こと。やる時にはやろう。できないのはやらないからだ。一人でも多く

の信頼のできる友を持って。そして豊かな人生を送ろう。高校時代こそ最良の友人をつくる絶好の機会だ。とも話されました。

就職難で大変な時期、今までは会社を選べたが、これからは働くところが無くなる。会社は根性のある者を求めている。仕事が出来るかどうかが役立つかどうかの能力主義である等経営者側から見た厳しい現状も話された。勉強・スポーツに頑張って立派な社会人になってください。「青春は再び帰らず」。大切な一日一日を、自分自身に納得できる生き方をしてください。「友ありて人生楽し」

在校生には、これからの進路決定に対する心構え・良きアドバイスとなる貴重なお話を頂きました。



戦後五十年特集

私の八月十五日

前後

20D 五十嵐健雄

アジアからメラネシアへと戦域を拡大した太平洋戦争は戦雲急を告げ、大学生を学徒出陣として第一線へ送り込み私達生徒も軍需工場へと、学徒動員の発令を受けました。

昭和十九年四月私達桐生は三年生、四年生、五年生が中島飛行機太田製作所へ派遣されました。三ヶ月後私達色染科五年生のみ桐生工場（現在の産文会館、桐生市役所付近）へ転属され、そしてその秋には母校桐生工業の学校工場へ再度転属されました。翌昭和二十年四月には桐生工業専門学校電気科（現群馬大学工学部）に入学したものの「現在の職場で待機せよ」とのこと引続き学校工場に残っております。

各地で爆弾攻撃焼夷弾攻撃を受け工場も都市もその機能が麻痺しており、更に毎日続く空襲警報下の八月五日、学校よりの連絡で中島飛行機小泉工場へ動員を受け太田市西矢島寮へ入りました。先ず蚕の先制攻撃を受け、その数は筆舌に尽くし難たく猛烈な量でした。

「今日は正午に重大放送があるから全員待機せよ」の命があり正午を待ちました。勿論上半身は裸であり着けているのは汚れたズボン一本だけでした。既にソ連軍が不可侵条約を破り満州へ越境してきており、これに対して宣戦の布告の放送であろうとその時を待ちました。ポロポロに破れた畳の上に置かれた古びたラジオを、西田教授を中心に約七十名の学生が車座になつて囲み真剣に聞き入りました。ラジオの具合が悪く聞き取れません。全くの予期に反して連合軍に対して無条件降伏であり耳を疑り茫然自失で

それよりも何よりも苦しかったのは空腹です。ジャガイモの角切りに米粒の着いた茶托くらいのお皿に盛り付けたのが朝食でした。一皿一食分では腹の虫が収まらず、昼食の弁当もこれですから一緒に買い二食分を食べてしまいました。由つて昼食は無いから付近の農家へ胡瓜を買いに出かける。勿論いやな顔されながら一本譲り受ける。これが昼食でした。尤も胡瓜がトウモロコシ位に大きいです。ここで涼を取り昼寝に入ります。暫くすると膀胱が破裂しそうで目が醒

める毎日でした。動員を受けて工場へ行つても仕事が無い、幾重にも巨る爆弾攻撃を被り既に機能が完全に麻痺しておりました。戦況は刻一刻と破壊に近づき、六日には新型爆弾（原子爆弾）が広島に落ち、九日には長崎にも落ちる。近くでは前橋、熊谷、伊勢崎等連続して毎夜焼夷弾攻撃を受け街は全焼して死の街と化し、桐生の順番の先送りを祈る毎日でした。

した。暫くして自暴自棄に陥り興奮醒めやらず軍歌を高唱し戦意を鼓舞し、米軍上陸に際し最後の竹槍攻撃を敢行し祖国と共に散ろうと真剣に考え、三日後の再開を誓い各人一日家路に就きました。両親の反対を振り切り現地に赴いたら集まったのは七人のみでした。すべてが終わったので

ちあった者達には生涯忘れ得ぬ衝撃的な人生を送る事になる。殊に一、二、三回、四回生の一部は戦争、殺るか殺られるかの峻厳苛酷な現場に立たされざるを得なかった。其れが戦後遺症として残ってしまったのです。私の場合を述べて見ると思まわしい生と死が付き纏つたのです。団体の旅行や具合が悪くて入院する時には寝る前、入室する前に部屋の人々に挨拶をするのです。「夜中に大声で叫んだり暴れる時がありますのでびっくりしないで下さい」勿論そう言った所以を多少説明はします。時間が取れる訳ではありませんから或いは理解の外かも知れませんが。（理由に付いては自分史、英霊部隊書いて有りますし、十数冊未だ手許に有ります）沖縄防衛戦の為南西諸島ぞいに南下中S十九年六月二十九日早朝双眼鏡で波打ち際の砕ける白涛が見る事の出来る徳之島の東方海上で、アメリカ力潜水艦の三発の雷撃で瞬時に轟沈され四千三百余名中六百余名を残して瞬時に海没全滅、助かった将兵も虹蓮の炎に奔弄され全員



戦争後遺症

15D 矢田 竹造

戦後五十年ノアツと言つ間

の時間です。此の時間帯に立

酷な火傷を負っていた。身の毛もよだつ地獄絵を見る。が地獄を覗いて来たのだから再びあの恐怖が蘇って来そうなものだが不思議に生きたという現実が恐怖感を緩和してくれる様だ。うなされて大声を上げたり飛び起きたりするのとは違うのです。斬り込みで暗夜漸く敵の壕の下に辿り着き軍刀を抜いて飛び込もうとする、ふと上を見ると知らぬと許り思つて居たのに一人のアメリカ兵が目を血走らし黒光する拳銃を擬して居る、一瞬血が逆流するが殺すか殺されるかだ。此方が一髪敵兵を斬つたのか敵兵が一瞬早く引金をひいたのかそんな間髪の時、又、平素もつ慣れて居る筈の雪崩をうって投下される爆弾、見えるという余裕があるから大して怖くなくなっているのだが頭上の爆弾が点に見える時は真つ正面だ。高見の見物とは行かない。側の爆弾溝にとっさに軀を投げ込む様に跳び込む、あの爆弾は間違ひなく頭上に落ちて来る。その様な時である。又、滑走路上で突然グラマンの機銃掃射をうける、轟音と共に土煙

を跳ねとばして弾丸が奔る、一撃したグラマンが急反転して二撃を加える、弾着が土煙を上げる。軀の延長線上だ。やられると思つた瞬間だ。不思議に其の結末を見ない間の事と時間である。殺されたかも知れぬ殺したかも知れないの時間帯である事でどちらと結末が付かない所で終わるので或いは命永らえて居るのかも知れないと思つている。どちらかに結末がついた時、若し其の結末が自分の方が殺されていたら霊は屍を見降ろしている事になる。或いは粉々になつた肉片を眺めている事にも、又20ミリの機関砲が貫通して首が吹き飛んだ所を霊が宙から眺めている事になり兼ねない。血飛沫を立てる戦場から帰つて来ても死との感情が消えないのだから精神病者の様な感覚でいつも付き纏うのかも知れませんが。戦後五十年を経て今だ悪夢に苛まれるのは戦場にあつて実際に戦闘に参加した者の宿命とも言える戦争後遺症と言つべきである。諸君達の先輩は殊に

抱え乍ら戦後も奮闘した事を知つて貰いたい。

死地を脱して

海洋訓練

26W 松井賢一

昭和二〇年七月三〇日（一九四五年）の朝まだき、桐生工業の一年生（現在の中学一年生）として、色染科・紡織科・航空機科（戦後機械科に変更）より選抜された、六〇名が太平洋戦争の次期戦闘要員としての訓練を受けるべく桐生駅より榛名湖に向つた。（引率は故生駒庄三郎先生）、新前橋を経由し洪川駅に到着、洪川駅より、現在は廃止されているが、洪川―伊香保線の一両電車に乗り込んだ。電車の音で気がつかなくかつたが、洪川は空襲警報発令中で、駅を出て二・三分で電車が急に止まった。突然、上空に爆音がする。こわこわ車窓から見ると、低空飛行の飛行機が飛び交う、翼には、丸に星のアメリカの艦載機だ、操縦士の横顔がはっきり見える。機銃掃射の音が、激しい音が轟く、



駅が攻撃されているのか、電車は嵐だらけの中に立往生している為、籠の中の鳥同様逃げ場とてない、低空飛行の機上からは視野に入っていないように、狙らわれたらひとたまりもない、全員恐怖と不安におののく、飛行機が旋回の為遠ざかるを待つて二十人程が車外へと飛出し、芋畠を七、八十メートル突つ走り、桑畠に待避する。何人かは、電車の下に、私は逃げ遅れて座席の下に、始めて味わう戦争体験である。

無事榛名湖に着く、高崎工業二年生も配属されており、我が校と合同により、海軍教官による六日間の激しい海洋訓練が始まる、六時起床、食事は三食共「コウリヤンめし」か「大豆めし」一日たつぷり絞られ、顔には「びんた」尻には精神棒という「バット」の雨が降る。一人悪くとも連帯責任で全員鉄拳制裁を受ける。夜は疲れに疲れ就寝する。当時十三・四歳の学生として良くやったものだ。当時を偲ぶ、実弾こそ使わなかつたがさながら戦争に等しいような訓練であつた。

六日間の海洋訓練をなんとか消化し、全員無事帰還となつた。帰途伊香保温泉でひと風呂浴びたが、肩の荷を下した全員が昨日までの苦しさを忘れ、はしゃぎまわつていたのが、今でも脳裏に焼き付いている。

桐生に帰つて二日後、広島に新爆弾（原子爆弾）の投下が続いて長崎にも、そして十日後には、思わぬ終戦を迎える事となつた。

「戦後五〇年」敗戦や食糧難を克服し、日本は世界の経

済大国となった。その目覚しい発展も、昭和一桁生れの我々も、一翼を担ってきたものと自負している。それには、敗色濃い日本の戦争末期、榛名湖での海洋訓練の貴重な体験が体の中に生きていたのかもしれない。その体験は、正に生きた教科書であった。

追憶

S十五年機織科

原田 一郎

昭和六年、私が小学校三年のとき、満州事変が勃発して日本軍が満州に進出した。

そして、私が桐生工業学校に入校した翌年、昭和十一年二、二六事件が起り、政治に多くの軍人が参入するようになり、国は帝国主義が旺盛になった。

昭和十二年、蘆溝橋事変で日中戦争となり、南京を占領し戦火は拡大した。

昭和十四年、ノモンハンでソ連軍と対戦し、惨敗の憂き目に合い、国は戦時態勢に推移する年代になった。

学校も一段と軍事教育を加味するようになった。そして教練の科目も設定され、軍隊と同様の訓練が始められた。教官も陸軍の予備士官の少尉或いは中尉が配属され、助手には下士官が命ぜられた、全く歩兵部隊の縮図である。校庭の北隅に兵器庫が建立された。

軍の小銃の主力、三八歩兵銃（口径六、五ミリ）と、先に関発された十三式村田銃、合計七十丁が木柱に立ち掛けられ、その下端に帯剣が吊り下げられて一対をなしている。

その他に演習服などが整理されて総て軍用具を格納した。歩兵銃そのものを木製で作

り、相手と覗み合せてエイヤーとばかりに刺し合う練習を重ね、軍事教練の一端を把握させられた。暫くして、実物での訓練が始められた。校庭に麦藁人形を五本、五メートルおきに並べせ、竹槍でなく、短剣を差し付けた三八式歩兵銃を右手

で持ち整列して教官の指示を待った。

教官は「お前たち、気を付けて慎重に行動せよ、うっかりすると大怪我をするぞ、よいか、前の藁人形の中心に銃剣をさし込めよ」教官は「一、二、三」と大声をあげて、右手を下して合図した。

前列の五人が銃を構えて一斉に人形に向って走り出す。目標に迫ると「エイヤー」とばかりに必死の怒声と渾心の力を振り絞って突き刺すのである。まるで、人殺しに他ならない稽古には聊か奮え心が湧き立ち、寒気を誘われる始末である。

五回も人形に向って走ると体力の消耗に甚だしく、草臥れこと、ランニングなどの比ではない。

時代も段々と戦時態勢に推移しているので、余りよい気分ではない。

丁度時代劇映画で、武士が日本刀の切れ味を試して笑顔を見せるが、私も現実に小銃を使用するの演習である。随分と心に抵抗を感じて嫌な気を味わうのである。

校庭に兵器庫を建設されたと同じ意味で、歩兵銃の射撃訓練のために射撃場を開拓した。学校の北側の山並みの雑木林を切り開いたのである。射程距離は一〇〇メートルで射撃幅は二〇メートルとし弓道と同じ丸い紋印を五枚並べた。

銃には兵器尊重の意味から薬室上部に菊紋が刻印されている。発射法は伏射が主体だ。発射の引き金を引く時、「闇の中霧が静かに降るように」と言われるように静かに徐々に締めるのだ。引金を急激に引くと、肩に酷い衝撃をうけて、ピクツと肩骨を割ってしまう感覚が身に迫った。

始めての実弾射撃であったので意のままにならず、恥ずかしさが心に浸みってきた。十七歳で、日本帝国の一員

となったと思い、徴兵検査に向は召集されると胸に浸み

ジャンク箱から

20W 青木 清

わたしが桐生（県工とも呼ばれた）に入学したのは、昭和十五年。三年前に支那事変（日中戦争）が始まり、本日も戦時色に染まっていた。五十年以上も前の記憶なので、ジャンク箱（使い古しの不要部品などの収納箱、今どき使われない）の中身のように錆び付いてしまっている。

入学式の翌日の放課後、講堂に集合し、校内清掃を始め前のこと、（木造の講堂で体育館も兼ね、今の北門付近にあった）一年生は各班毎に最前列に立たされ、班の前には班長の上級生が、こちらを向いて立っている。五年生が次々に壇上に立って、激しい



軍事教練

口調で下級生を叱りつける。小学校卒業直後の年齢から見たら、四才年長はオジさんである。そのオジさんたちに訳も分らず威勢をつけられ、怖くて足がブルブル震えた。トシダ学校に来たもんだと思つた。そのあと掃除だが、各自持参した雑巾で、中腰になつて後退りしながら拭く海軍方式で、教室の床が光るまで磨かされる。班長の目が光つていて手抜きもできず、終わると班長が、担当教師に終了の報告に行き、戻ると講評があつて、解散となる。

普通に授業が行われたのは三年生の途中まで。その間、ときどき赤城山登山や、農家の応援も実施された。やがて太平洋戦争に突入。戦況は厳しくなり、三年生になると、飛行機生産の応援のため、太田市の中島製作所に行った。学徒動員である。各地から男女生徒が動員された。本校の三年生以上は太田市の東にある寮に入れられ、毎朝三十分以上も歩いて工場に通つた。寮の食事は、想像以上の少量で、生きるだけの毎日。空腹の連続であつた。その後次第に状況は悪化。太田も空襲され始め、その都度金山々麓に避難した。やがて空襲の回数も増し、ついには学校工場として各地に分散させられた。美しくかつた学校内部は、土足で荒らされ、教室は部品や工具類で埋まり、母校は見る影も無くなつた。

物も食料も娯楽もない、夜は空爆を警戒して、灯火は外に漏れないように囲い、敵機が来るたびに、郊外に避難してた。だが、先輩の中には、戦場に散つた人も多い。本人はもちろん、家族にとつても口惜く、悲しいことである。こんな時代に青春を送つた人たちの話は、掘り返せば限りなく有るうが、みな辛く苦しむことばかり。その年代の人は成長期の栄養不足がたたつて短命な人が多いようだ。終戦を迎えたのは卒業の数ヶ月後。その後も耐乏の数年を強いられた。長い平和な年月を過ぎた今、聞く人にとつて、実感は薄いだらうし、話す人にとつては、思い出したくも無いものも多い。錆び付いた記憶を辿つたが、確かなのは、二度と戦争は経験したくない、という思いだけ。



あの日あの時

24D 本島 清仲

忘却とは忘れざる事なり、と云う言葉が戦後のラジオドラマの中で云われ一世を風靡した事がありました。正に私達昭和一桁生れ者には、あの忘わしい昭和十六年十二月八日は忘れられないページの始まりでした。

今になって思えば何も知らされず、とにかく日本はアジアの君子国であり、聖戦の名のもとに日々戦局の拡大となり、国民皆兵が叫ばれ、戦局は益々拡大し、その反面国内には軍需産業に於て人手不足が大きな問題となり遂に昭和十八年学徒戦時動員令が決定された。私達桐生の生徒も航空機生産に従事、低学年は農村での麦刈り、稲刈り作業等々農家の手助けと日夜励んだものです。戦局も急を告げて来る一方で、南方での兵士が使用する軍手、軍足が白ではジャングルの中で目立つと云う事で、桐工、桐女、計百名が朝倉染布に学徒動員され、来る日も来る日も軍手・軍足を国防色に染める毎日が続きました。その様な日々であつたが、時代が時代であり、女学生等と話する事が出来て、多感の青年時代一諸の所で働く事状で、皆胸をときめかしていたのではないだろうか。

次は航空機の技術向上に伴い特にエンジン部分の高出力の開発のため、それに必要な潤滑油が必要となり、桐工から帝国潤滑油工業へと動員、北海道大学の教授・学生が主たるメンバーで毎日毎日油まみれの作業が続きましたが、その内に戦局が悪くなる一方で、南方の島々が、敵の手に落ち「テニアン」からB29の都市大空襲が始まり、群馬県も、太田の中島飛行機、前橋伊勢崎と次々に空襲のため破壊され、桐生も、今日か明日かと緊迫した日が続きまして。そしてある時は、敵の艦載機の機銃掃射で溝の中へ夢中にげ込んだ事もありました。

そして運命の八月十五日当日工場内に全員集合、ラジオで終戦を知らされたけれど、その時は何の感傷もなく、暫

らくしてから、これからの日本はどうなるのかと頭の中が真白になった。又ある時は校内にある武器類の掃と云う事で三八式、村田式歩兵銃、剣道の防具一切を校庭で焼却した事等が思い出される。やがて学校生活が戻って来たが戦後の食糧難時代となり、夕ケノ子生活の日々が続き、学校では除々にスポーツも盛んになり、各運動部も毎日毎日腹をすかし乍ら、頑張ったものです。五十年経った今、二度とあの様な悲惨な事の起こらぬのを祈るのみです。

朝倉染布での 勤労奉仕

23W 米山 稔

平成四年四月二十五日、桐生市浜松町の朝倉染布株式会社を私達桐工卒業生四十二名と桐女卒業生二十五名が訪れ、工場見学の後、市内たるま本店において会社関係者と合同の懇親会を開催した。この会は「学徒朝倉の会」と呼ばれ、その様子が「桐生タイムス」にも紹介された。

太平洋戦争の戦雲急を告げる昭和十九年夏、戦場で敵機の攻撃目標になりやすい白い軍手、軍足を緑黄色に染色するよう朝倉染布に軍命令が下ったが、三百名を超えた従業員も多くは戦場に出陣または兵器工場などに徴用され、当時は高齢者と女子のみ七十名足らずに減員し、人手不足にどうしても納期に間に合わせる事が不可能となった。そこで私達桐工生(当時二年)と桐女生(当時四年)に勤労奉仕の命令が下った。私達は三科(色染、紡織、機械)が各科一週間交代にて朝倉へ出勤し、染色・脱水・乾燥・運搬などの作業に約三ヶ月従事した。

染め班にならぬよう染液を掻き混ぜる作業は、ちよっと気を抜けば高温の染液が飛び散り火傷する。じっとしていても汗が出る夏の真盛り四十度以上もある乾燥室での作業、今ならどの作業もすべて自動化されているだろう。桐女生は染色した軍手・軍足を仕上げ検査する作業だった。この当時、同じ工場内で働いている男女学生が言葉を交

わすことなど出来ず、互いにその働く姿を垣間みて胸をときめかせていた。私達勤労学徒の合い言葉は「神兵の神衣を謹製する」であった。そして昭和十九年十二月、今度は学徒動員として軍用飛行機生産に従事、二十年になると益々空襲が激しく、母校の講堂や教室がそのまま飛行機の部品工場となり、八月十五日の終戦までこの学校工場で、先輩に続けと花も蕾みの若桜五尺の命ひっさげで國の大事に殉ずるは我ら学校の面目ぞああ紅の血は燃ゆるこの歌を合唱しつつ励ましあった。

振り返って母校在学の昭和十八年四月から二十三年三月までの五年間は戦中戦後の混乱期であり、勉学に集中出来る時代ではなかった。しかし理由はなんであれ、青春を力一杯生き抜いたことに後悔はない。これは私だけでなく同級生すべての気持ちだと思っだからこそ、その一体感が現在のクラス会の絆になっ

るのではなからうか。朝倉染布での勤労奉仕はガダルカナル島撤退、アッツ島玉砕、サイパン島玉砕と暗いニュースばかりの中にあつて私達の青春のページを物語る忘れ得ぬ思い出である。あれから四十八年、戦火をくぐり抜け、戦後の混乱を乗り越えた、かつての紅顔の少年とつら若き乙女が共に六十才も過ぎ、ただ懐かしく再会の夢を果たした。これが平成四年四月二十五日の「学徒朝倉の会」であった。



開校間もない 桐生工業学校入学

16W 松永 秀雄

昭和十二年四月、定員の二倍以上という比較的志願者の多かった桐生工業学校機械科に入学することが出来た。色染科十五、機械科三五、計五十名という定員で同級生の殆どは景気のいい機屋さんか染物屋さん、これに関連した仕事をしている家の子弟達で農家の出身は私を含めて四人だった。

当時農村の人達は旅行に出たり、街へ出る機会など殆どなかったから、学校では日常の話題など環境が違いすぎて気安く溶け込みにくい面を強く感じていた。毎日が何か物珍しい社会に入ったという感じで学校の門をくぐっていた。見るもの聞くもの全てが奇異に感じられて、興味深く目を見張るような毎日だったが、教室での勉強は真面目そのもので講義を聞いたせいもあってか、一年一学期の成績は自分でも予期していなかった

い成績だった。

この頃の桐工は学期末になると、全学年、全生徒の成績席次が生徒控室に貼りだされ、平均点までも書き込まれるという念の入れようだったので、上級生の成績を見ることなどたやすいことであつた。勿論先輩の席次表など覗き込んでいたことが判ると必ず後で殴られるという筋書きだった。こんな開放的と言おうか生徒にとつては実に厳しい成績発表は、現在の教育の場では到底考えられない事だろう。

桐工は開校されて間もない小さな学校で、私が入学したときは四年生が最高学年で、全校生徒数は二百人足らずだった。校庭は三角形の狭い庭が一つあるだけで、少ない生徒数でも、充分に運動が出来るようなスペースには到底足りなかつた。野球部が練習する時などは、他の部活動は殆ど出来ない状況だった。

を校庭造りに人海戦術を展開した。土を掘り返す者、もつこ担ぎで土を運ぶ者、地ならしをする者、石のローラーを転がす者など、汗の勤労作業が連日続けられて、殆ど休みのない夏休みとは言えない一カ月を過ごした。

こうしてどうやら走り回れる形ばかりの校庭が出来上がったが、夏が来ると雑草が止めどなく生えてくるから、その草退治もまた大変な作業だった。来る年も来る年も、体操の時間や休講の時は必ず校庭に出て草むしりという、農業学校の畑実習そのものだった。「今日も朝から草むしり」と言う合言葉が出来て、生徒の口を衝いて出るような学校生活が繰り返されていた。

昭和十三年、年々増加する生徒のために、隣接の広い田んぼを買収して校庭を拡張する計画が出来た。そのためこの年の夏休みはすべて返上させられ、全校生徒は暑い毎日

六年十二月二六日には春三月をまたずして卒業式を済ませた。なにはともあれ「一日も早く職場についてお国のために働けたというわけである。」

皇紀二千六百年

18W 田村 猛

あれは確か桐工の入学試験だったと思う。当時の試験は学力、体育、身体検査、口頭試験と四つあり、その中の学力試験の一つに「皇紀二千六百年は昭和何年ですか」という問題があり、その答は昭和十五年であつた。

当時を振り返って見れば、昭和十五年という年は、希望に胸をふくらませ元氣一杯の桐工二年生であつた。

現在は西歴が主で平成という年号が従であるが、当時は皇紀何年、昭和何年、西歴何年と三つが通用していたし、歴史の年号を覚えるのに大変苦労をした事を覚えている。因に西歴に六六〇年を加えると、皇紀になる筈である。或る日学校の先生から、皇

紀二千六百年を祝って、〇月〇日に行進をする、その時にプラカードその他を、学年別に用意する様に通達があつたので、吾々の学年でも皆で集まって会議する次第になつたが、学年といつても一クラスで、その中に機織科と色染科が一緒になり、専科の授業だけ別々になる学年であつた。クラス会が何回も開かれてその結果、工業を表現するのに歯車で行くときまつた。もっとも機織科は四〇名で色染科は二〇名だったせいもある。図案絵具、ボール紙、竹桿、等材料を揃え放課後机をどかして、ワイワイガヤガヤ皆で製作を始めた。何日も掛つた様な気がする。

学年別なので、上級生下級生別なく作品は当日まで秘密であつたので、当日校庭に集合した時は、あちこちで「ホー」という驚嘆の声があつた。確か天満宮から新川球場までだったと思うが、日の燦々とふりそぐ中、制服制帽ゲートル巻きの出立ちで、吾々二年生は太鼓を鳴らし行進を始めた。一年生二年生と順に校門を出て、写真にうつつてい

る処は四丁目の高島屋を過ぎ、周藤刃物店前で、右下の日章旗の処にいる人は船橋先生、左中央で日章旗を持って立つて居るのは菊谷先生だと思つた。あれから五十有余年敗戦により儒教の男女七才にして席を同じうすべからずの精神、教育勅語や大和魂の教え、学校教育から修身、公民の課目が消えて幾く久しい。

最近テレビ新聞紙上でオウム関連の報道を見るに、犯罪の陰湿さ、残酷さは目を覆うものがある。又一方学校のいじめ、交通事故の増加等、如何に人生を歩むか知的教育に併せて精神教育が必要か、痛切に感じ入る昨今である。



学校教練

について

つて代るることになりました。昭和十二年には校内に銃器庫が完成し、十一月八日には全校生徒を動員しての野外演習が行われました。

軍事教練は兵式体操や発火演習というかたちで、明治期から行われていましたが、公的に教練という名称が使われるようになったのは、大正二年の「学校体操教授要目」が最初であり、「群馬県学校教育史第四巻」その後大正四年の「陸軍現役將校配属令」

教練の成果を発表する場である「査閲」が本校で実施されたのは一年生から三年生までがそろった昭和十三年からです。第一回の「査閲」はおよそこの年の十一月頃行われたと思われるが、詳細は不明です。

によって中等学校に陸軍現役將校の配属が決まり、「教練実施の状況」の「査閲」も法制化されました。

第二回の「査閲」が実施されたのは昭和十四年十一月十五日でした。また、その三十日に「全校体力テスト」が行われました。

昭和六年以降になると軍事教練も一段と熱が入るようになり、集団訓練から実戦訓練に重点が置かれるようになり、昭和十二年の「日中戦争開戦以降は学校生活に大きな変化を与えるようになり、とりわけ軍事教練は激化の度を加え、同年五月の「学校教練要目」の改正によって臨戦体制が一段と強化されました。この頃になると配属

「査閲」というのは教練の成果を「査閲官」の前で披露し、講評を受けるもので、当時の学校ではその成績評価を重視しました。その「査閲」の前には二、三日を費やして予行演習を行うのが通常でした。特に桐工には隣の群太に

に、予備役の兵科佐尉官をも

来ていた大佐クラスの人が責任者としてきており、その関係で教練は大変厳しかったと言われています。

勤勞奉仕作業

について

桐工でも十九年一月上級生は明和村に出動し、約一カ月寒風の中土地改良の作業に従事しました。さらにその他に、高崎操車場の地均し工事、生品飛行場の土盛作業等も行

生徒の勤勞奉仕作業は昭和十二年から十五年頃までの前期と十六年以降の後期とに分けられます。なぜそのようになったのかは、日中戦争の開始による物資不足と労働力不足とが社会問題となったのがそもそもの原因でした。

また、昭和十六年には県下の中等学校校友会が学徒団に改組されると同時に、勤勞奉仕とともに自ら食料増産に乗り出しました。場所は現在の旧中里橋付近八百坪の土地を借りて畑にし、「報国農園」と命名、ジャガイモ、キャベツ、大根、等を作りました。

群馬県では昭和十三年四月各中等学校の学則を改正し、夏季特別指導期間を設けました。桐工でも勤勞作業を行いました。

本校の軍需工場への動員は昭和十九年四月下旬または五月上旬ごろ三、四、五年生約三百三十名が中島飛行機太田製作所（現在の富士重工太田工場）へ行きましたが、五月

昭和十六年になると勤勞奉仕が、実施法制から義務法制に変わり、それらは益々強化されました。昭和十八年頃からは緒戦での敗退が続く戦局が不利となり、軍への動員が増加し、食料関係にも問題を生じるようになりました。

その後は生徒の強い希望もあって通勤となりました。作業は飛行機の胴体を作る仕事で、リベット打ちなどをおこないました。

日本への空襲が激しくなってきたからは十二月いっぱい太田製作所から引き上げ、桐生で飛行機の部品を生産していました。（富士紡桐生工場、現在の産文会館）

本校の学校工場開設は昭和十九年十二月八日から、機織工場、色染実習室、機械工場、生徒控え室など四百坪を学校工場として、エアコンプレッサ、穿孔機、グラインダー、その他の工作機械を据え付け、飛行機の胴体の枠、尾翼などを作りました。



「桐工五十年史より」

勤勞奉仕

平成七年度

同窓会総会

23支部・96名参加



平成七年六月二十日、桐生市産業文化会館にて23支部から役員の方々が出席され盛大に開催されました。

開会にあたり、同窓会長並びに学校長より挨拶をいたたき規約に従って、会長の議長で議事に入りました。

平成六年度事業報告、平成六年度決算・監査報告を承認し支部設立活動状況報告がありました。特に前橋支部設立の報告があり出席者一同喜びにわきました。さらに、平成

七年度事業計画、予算案の提案があり満場一致で承認されました。又、会則に新しく現職教頭職は、在任期間顧問に推薦する事が提案可決されました。最後に、学校長より国際交流を推進するための補助(50万円)についての謝辞がありました。(七月に生徒六名、職員二名、学校長がそれぞれニュージールランド・中国に出かけました。)



第四回同窓生親善ゴルフ大会が初めて赤城カントリーに会場を移して盛大に開催されました。総勢一七三名が参加し例年通り一日中桐工の校歌が流れる中で支部対抗戦をメインに行なわれました。

第四回 同窓会 ゴルフ大会

引き続いての懇親会には先輩後輩・新旧睦まじく同窓会総会ならではの雰囲気、思い出しに花が咲いておりました。最後に、校歌を全員で高らかに歌い次回での再会を約束し合い名残り惜しみながら閉会となりました。今年もガンバリましょう。



実力がだせたね

支部対抗の部
優勝 数塚支部
準優勝 第八支部

田島氏もラッキー賞



- | | | | |
|------|------------|---------------|----------|
| 三位 | 第四・五支部 | 優勝 数塚支部 | 合計 三五八、六 |
| 四位 | 笠懸支部 | 毒島広治・武井庄太郎・岡部 | |
| 五位 | 第十六支部 | 昭夫・関口松男・二渡富雄 | |
| 六位 | 第七支部 | 準優勝 第八支部 | |
| 七位 | 大間々支部 | | |
| 八位 | 第十四支部 | | |
| 八位 | 第十五支部 | | |
| 十位 | 三六、十二、十八合同 | | |
| 十一位 | 第十七支部 | | |
| 十二位 | 第一支部 | | |
| 十三位 | 第十支部 | | |
| 十四位 | 第十一支部 | | |
| 十五位 | 第十五支部 | | |
| 十六位 | 太田支部 | | |
| 十七位 | 加藤鉄工支部 | | |
| 十八位 | 前橋支部 | | |
| 十九位 | 足利支部 | | |
| 二十位 | 第九支部 | | |
| 二十位 | 埼玉支部 | | |
| 二十位 | 職員チーム | | |
| 二十三位 | 本部チーム | | |
- 個人部の
優勝 関山 保夫(第八)
準優勝 青木 慶夫(笠懸)
第3位 津久井孝充(加鉄)
- 各賞の部
ベストクロス
井沢 一彦 七一(一般)
杉戸 清二 八一(シニア)
ドラコン
小野田正司・田島孝宏
ニアピン
海野清二・長谷嘉春・大友昭
久・和田昭彦
以上でした。 オツカレ



偉業達成

市内全支部設立完了ス
市外・県外支部充実へ

第八支部設立に よせて

第八支部長

江原 満

日頃、大変にお世話になつて
いる武藤接骨院長から連絡
があつて、桐生工業の同窓会
の第八支部を設立する趣旨の
お話があつた。桐生市内で設
立されていない地区は第八区
だけで、設立の準備をすすめ
たいとのことであつた。

勿論、設立の趣旨には諸手
をあげて賛成したが、武藤先
輩がお膳立てしたものに付い
ていけばよいと考えていた。
発起人会が出来、集会の当
日、私は仕事の関係で止むな
く欠席するはめになつた。

その結果が欠席裁判で支部
長の推薦を受け、もとよりそ
の器でないが、先輩の決定に
背くわけにもいかず、引き受
けることになりました。

平成六年十二月三日、学校
側から加藤校長をはじめ中里
岡部両先生、同窓会本部から

池田、周藤両副会長のご臨席
をえて市内、美喜仁館にて設
立総会が開かれ、市内最後の
支部が誕生いたしました。当
日の参加者二十九名なごやか
のなかに親睦の輪をひろげ、
今後の会員増強や活動を語り
あつた一夜でした。

末弟として生まれた支部で
先輩支部の指導を得ながら、
会の目的である親睦と母校の
発展のお役に役立ちたいと思
つております。

最後になりましたが、設立
にご尽力下さつた武藤先輩に
心から感謝申し上げます。

県都前橋に支部設立

支部長 荻野 章

本年三月十八日桐生工業高
等学校同窓会前橋支部が設立
されました。秋深い昨年十一

月二六日第一回発起人会を開
催してから本部のご指導と発
起人皆様のご苦勞により準備

作業も完了し、設立総会を予
定どおり開催することができ
ました。特に前橋市内及び近
隣地域で三〇〇名近い同窓生
が在在しておるのには驚かさ
れました。設立総会には前橋商
工会議所松の間で開催され、
当日は本部から五十嵐会長、
池田、平賀両副会長、加藤学
校長並びに中里事務局長がご
臨席くださり、設立総会に華
を添えていただきました。総
会には特にご苦勞をいただいた
慶徳勝正氏より経過報告があ
り支部規約の承認、役員を選
任までとごおりなく終了し
ました。五十嵐会長、加藤学
校長からは前橋支部の発展を
期待している旨のご祝辞があ
り、その後の懇親会も盛会裡
に終了することができました。

学校だより

THE FIRST
TRIP TO NEW
ZEALAND
(July 18th~31st,1985)

機械科教諭 尾池 武

ニュージールランド・オーク
ランド市郊外のワイウクカレ
ツジへ七月十八日、桐商、高
工の生徒、職員と共に二十五
名の訪問団として、桐工初の
訪問をいたしました。

今回の訪問は、三十一日ま
での十四日間の日程で行なわ
れ、前半はホームステイをし
ながら、ワイウク校の授業を
受け、後半の研修旅行では、
ワイトモ鐘乳洞やワカレワイ
ワの間欠泉、先住民であるマ
オリ族の資料館を見学したり、
オークランド市内見学やショ
ッピングを楽しみました。

以上のように、この訪問の
中で、NZの自然、文化、伝
統、生活や人間性に触れるこ
とができました。国際交流の
輪を広げる役割りを果たすこ
とができたように思われます。

最後になりましたが、校長
先生をはじめ、多くの先生方
や同窓会の方々に感謝申し上
げ、報告いたします。

(ワイウクカレッジでの歓迎会)



第一回桐工フェア

建築科教諭 木村 孝

同フェアは、生徒たちが、
日ごろの授業のなかでつくり
あげた作品を一堂に展示し、
一般に公開したイベントです。
最近の中学生の志願状況を
みると、どうしても普通科に

偏りがち。工業高校はどんな
ことをしているのか。地域の
人たちに知っていたら多くの
一番の狙いでした。校内の生
徒同士でも、他の科のことを
知らないのが実情で、今回の
フェアでは、今後の教育活動
に生かせるものがあり、一回
目としては大成功でした。

全国大会で活躍

桐工定時制部活動

全国出場で好成績を収める

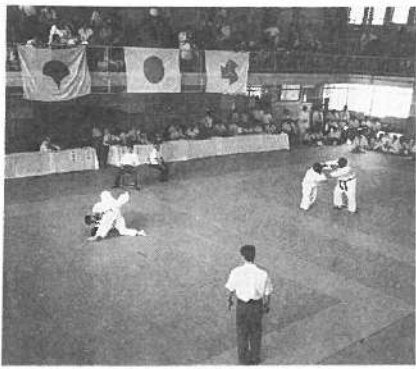
定時制柔道部

平成7年8月20日(日)東京の講道館で全国高校定時制大会が開かれ、群馬の一員として四年電気科田中政治・二年電気科小関勝美が出場した。

田中は群馬の団体戦の副将で二勝一敗、押え込みで頑張りが、予選で宮崎・岡山に勝ったが、トーナメントで宮城に負けて、ベスト8の成績。

小関は個人戦軽量級で阿部(岡山)に体落とし勝ち、2回戦武藤(秋田)に判定で惜敗したがベスト16に入った。

2人とも全国大会は初参加だったが、緊張しながらも良く活躍した。



第41回全国高等学校定時制通信制軟式野球大会

もう一つの甲子園 出場

定時制軟式野球部

平成6年夏、昭和42年以来27年ぶり4回目の全国大会出場を果たしました。全・定の境界を越え、同窓会をはじめ桐工内外の諸組織・個人からの並々ならぬ物心両面にわたる支援態勢、熱い声援を受けた

8月17日、駒沢球場に於て愛知代表、東海工(通)との緒戦の火蓋が切られました。

試合は亀田一井之部の好バッテリーが良くもちこたえ、幾かの攻撃の機会を作りましたが、強豪、東海工の猛打と我校の守備の乱れによる失点で、5-0の惜敗でした。

この様に熱い夏は終りましたが、選手達は忘れえぬ充実感を獲得したのと思います。

事務局だより

桐工同窓会の各行事も定着しつつある。総会や支部長会議もすっかりと根をおろすことができたし、正副会長会議等も顺利开展である。支部結成も第八支部の設立で市内は全て網羅することができた。桐生市近郊においても、大間々、藪塚、新里等で設立の下準備が進んでいる様子である。特に大間々、藪塚においては同窓会のゴルフ大会には参加して頂いており各チーム供、優勝するに至っている。ゴルフ大会等の行事を介して支部設立に役立てば、事務局としても幸いである。

同窓会の大イベントであるゴルフ大会も四回目を数え、大盛況のうちに幕を閉じるこ

とができた。武井庄太郎氏率いる数塚チームがネット平均アンダーパーの実力で初優勝し、連続ベストグロスの、小保方氏も今年はその栄冠を井沢氏に渡した。下山実行委員長をはじめ各競技・運営委員のパワーに新たためて桐工同窓会の底力をみせて頂きたい。

各行事を通して同窓会の横の連携がとれていけばそれだけでこの目的は達成できたと

言っても過言ではないと思う。同窓生各氏がそれぞれ積極的な働きかけや連絡がとり合えれば大きな力を持った同窓会になれると思う。一歩づつでも前進できることが事務局一同の願いでもある。皆様の協力と支援をお願いします。

今年度学校事務局に若干の変動がありましたので掲載させていただきます。

- | | |
|------|-------|
| 事務局長 | 中里 昌明 |
| 総務部長 | 星野 昭司 |
| 組織部長 | 岡部 政雄 |
| 会計部長 | 松本 正 |
| 編集部長 | 丹羽 政文 |



編集後記

桐生第七号は戦後五十年を特集しました。先輩各位より貴重な当時の想い出を投稿していただきまして誠に有難う

ございました。

小生が入学した昭和十九年当時校舎の床は料亭の廊下に勝るとも劣らない程ピカピカに光り輝いていました。米糠雑布で海軍の甲板掃除の様に行いました。又傷がつくとの理由で、上履は一切禁止されていた。きれいな母校も中島飛行機製作所桐生工場の分工場として軍需工場となり、土足で工場(校舎)の中を走り廻り戦闘機の部品の製造をいたしました。小生も操縦席の部分の胴枠の製造を担当しました。文字通り月月火水木金金で休日などは無い毎日でしたが、一日の勉強も行なわれないのに月謝(約六円)は毎月納入したと記憶していません。

学制改革により県立桐生工業高等学校と改称、この頃のノートの紙質が悪く鉛筆では破れて仕舞うのでボールペンが使用されたと記憶しています。次回の第八号では五十年を振り返ってスポーツ関係と学校の変革について編集したいと存じておりますので、ぜひ投稿をお願いいたします。

KA生